

【日本の大学】第27回——熊本大学：藩校や旧制高の伝統引き継ぐ

熊本大学（熊大）は、九州中部、熊本県の県庁所在地・熊本市にある長い歴史と伝統を引き継いだ国立の総合大学である。旧制第五高等学校からつながっている文学部、法学部、理学部や、師範学校からの教育学部、江戸時代の熊本藩の藩校などの歴史を祖にもつ医学部、薬学部など、それぞれが長い歴史を刻んできた。

熊大は、それらの学校を母体として1949年に新しい制度の下でスタートした。その多くが旧制学校の土地や建物を受け継いでおり、本部の置かれている黒髪キャンパスのうち北地区はかつて旧制第五高等学校のあった場所である。五高当時の本館は赤れんが造りの歴史的な建造物であり、現在は五高記念館として大学のシンボルになっていて、国の重要文化財にも指定されている。2016年4月に熊本地震が発生、五高記念館など多くの建物が大きな被害を受けた。現在は、記念館などの修復作業が行われている。



通称「赤門」と呼ばれている五高の表門、国指定重要文化財 1969(昭和44)年

剛毅木訥の気風

豊後街道（現県道 337 号線）を挟んだ黒髪南地区は旧制五高工学部の流れをくむ熊本高等工業学校だった土地で、国指定の重要文化財となっている工学部研究資料館などがある。本荘キャンパスは旧制熊本医科大学から引き継がれ、大江キャンパスは薬学部の伝統を受け継ぐ旧制熊本薬学専門学校だった所だ。

大学では、こうした伝統を守り、古くからの文化に理解を示しながら、国内外のさまざまな問題に関心を持ち、問題を解決する能力と自分の考えを説明する能力を備えた人材を養成することを目指している。そのための教育戦略として「旧制五高以来の剛毅木訥（意志が強く、飾り気のない様）の気風を受け継ぎ、“Global Thinking and Local Action” のできる人材育成」を掲げている。



五高記念館 旧制五高本館 国指定重要文化財 1969(昭和 44)年

以下、熊本大学のホームページなどからその歴史や教育研究の現状を見ていこう。

大学の系譜につながっている中で、最も古いのが江戸時代中期の 18 世紀半ばにできた熊本藩の藩校「再春館」と薬草園の「蕃滋園」であろう。再春館から 1871 年に官立の医学校兼病院が設立され、その後、熊本医学校、熊本医学専門学校、熊本医科大学とつながって熊大の医学部の母体となった。蕃滋園は熊本薬学校、九州薬学専門学校、熊本薬学専門学校と引き継がれて現在の薬学部となった。

漱石、八雲が教鞭

五高は官立第五高等中学校として 1887 年に発足、1894 年に第五高等学校となった。五高では、多くの著名人や偉人が在籍し、教鞭をとっている。講道館柔道の創始者であり、のちに東京高等師範学校(現在の筑波大学)の校長となった嘉納治五郎が五高の創成期に校長を務めた。文学者でもあるラフカディオ・ハーン(小泉八雲)や夏目漱石なども英語の教師として教鞭をとった。高名な物理学者で随筆家でもある寺田寅彦は、漱石を師として五高で学んだ。学内には、漱石の銅像や句碑、嘉納治五郎が揮毫した転刻、小泉八雲演説のレリーフなどがある。



夏目漱石先生の銅像



夏目漱石先生の句碑

教育学部の基となる県立熊本師範学校も明治時代初期の1876年から始まっており、何度か名称は変わったものの伝統が引き継がれ、戦時中に女子部と合体して官立熊本師範学校男子部・女子部となって終戦を迎えた。

これらさまざまな分野の学校を包括して熊本大学はスタートした。当初の設置学部は法文学部、教育学部、理学部、医学部、薬学部、工学部の6学部であった。その後、学部の体制としては1979年に法文学部を改組して、法学部と文学部に分離して7学部となった程度で大きな変更はない。1964年に教養部を新設したものの97年に廃止している。

大学院に関しては、各学部につながる研究科、研究部が1960年代から70年代にかけて次々に立ち上がっている。文学研究科、法学研究科、理学研究科、工学研究科、医学研究科、薬学研究科などで、これらは、この10年ほどの間に再編されて「人文科学研究部」「社会文化科学教育部」「先端科学研究部」「自然科学教育部」「生命科学研究部」「医学教育部」「保険学教育部」「薬学教育部」「教育学研究科」などになっている。

多くの学部、大学院は黒髪地区に集中している。文学部、教育学部、法学部の建物は北地区にあり、南地区には理学部、工学部の教室や研究棟が並んでいる。本庄地区には医学部や同附属病院が、大江地区には薬学部がある。

このほか、施設・機構としては、熊本大学病院、大学院先導機構 グローバル推進機構、国際先端医学研究機構、ヒトレトロウイルス学共同研究センターなどがある。

肥後熊本学を開講

全学部の学生が入学時から学ぶ教養教育は、大学教育統括管理運営機構が担っている。「多言語文化教育」「数理・データサイエンス教育」「地域を学び、考え、理解を深める」の3本柱からなっており、特色があるのは地域学として「肥後熊本学」を開講していることだろう。これは歴史、文化、社会、自然、環境、生命の6領域において熊本の身近な事物を見つめ直すことによって、より本質的で普遍的な課題への理解を深めて、「知」に変えていくことを狙っている。

地域や産学との連携にも力を入れている。熊本創生推進機構を設けて特色のある取り組みを進めている。県内企業の人材確保に向けた拠点の設置や人材還流システムに係わる包括的連携協定を熊本県や県内市町村と締結。県内企業との間で、次世代ベンチャー創出支援コンソーシアムを立ち上げるなど産学連携も実施している。

また、地域に根ざし、グローバルに展開する未来志向の研究拠点大学、というコンセプトの下で、「スーパースーパーグローバル大学創成支援事業」と、世界水準の研究機能強化を目的とする「研究大学強化促進事業」にも力点を置いている。



キャンパスの様子

文学部は、1979年に法学部と分離した際、哲学科、地域科学科、史学科、文学科の4学科でスタートしたが、その後、哲学科と史学科を人間科学科と歴史学科に改組(1997年)するなど改編を重ね、現在は「総合人間学科」「歴史学科」「文学科」「コミュニケーション情報学科」の4学科となっている。4学科のもとには九つのコースがあり、23の教育研究領域を持つなど、全国の国立大学の中でも屈指のバラエティ豊かな学部である、としている。約70名の教員による広範な授業があり、学生10人に対して教員が1人の割合となっており、こうした少人数教育が特色となっている。また、2017年には、文学部の附属機関として、かつて教鞭をとった夏目漱石と小泉八雲の名を冠した「漱石・八雲教育研究センター」を設置して、研究や講演活動などが盛んに行われている。

教育学部は小・中学校教員養成課程、その他の学校種の教員養成課程の2課程に加えて、社会教育・福祉などの学校教育以外の教育専門家養成を目的とした生涯スポーツ福祉課程

(1997年設置)、地域共生社会課程(2000年設置)を持っている。学部に附属して小・中学校、特別支援学校、幼稚園がある。

理学部は、基礎科学を研究する学部として、旧制五高の理科と熊本工業専門学校の一部を母体として発足。当初の6学科を2004年に1学科、13講座に改編し、学生は入学後2年間で志望するプログラムを選び、自分の適性を見定めたくて3年次以降の専門課程を選択できるようにした。

医学部は、6年制の医学科と、保健学士教育課程である4年制の保険学科からなる。江戸時代の藩校からの伝統を引き継ぎ、前身の私立熊本医学校(1896年設立)以来、1万人以上の卒業生を送り出している。

薬学部も肥後藩の薬園開設に端を発する伝統のある学部であり、「医薬を通じて人類の健康に貢献する総合化学である」との理念の下で、基礎知識を習得させ、生命科学を基礎とする高度な薬学的思考力と倫理観を備えた創造性豊かな人材を育成することを目指している。2006年には、薬剤師養成を目的に6年制課程の「薬学科」と研究者養成に特化した4年制課程の「創薬・生命薬科学科」を併設し、同時に全国の国立大学では初の薬学部附属創薬研究センターを設置している。

工学部は、1897年に設置された旧制五高工学部がルーツである。工学は、人や社会に役立つための科学であり、現在「土木建築学科」「機械数理工学科」「情報電気工学科」「材料・応用化学科」の4学科がありその中に、12の教育プログラムを持っている。



工学部研究資料館 国指定重要文化財 1994(平成 6)年

学生数は学部が男子 4517 名、女子 3135 名の合計 7652 名、大学院は男子 1458 名、女子 529 名の 1987 名である(外国人留学生を含む)。職員数は 2721 名(うち女性は 1357 名)。また、専任教員数は文学部 60 名、教育学部 71 名、法学部 44 名、理学部 71 名、医学部 306 名、薬学部 51 名、工学部 147 名となっている。(以上 2020 年 5 月現在)

学長は、熊本大学医学部医学科出身の原田信志氏が 2015 年 4 月から務めてきたが、任期満了に伴い、2021 年 4 月から 14 代目の小川久雄氏が就任する。熊本大学医学部医学科を卒業後、医学博士となり、医学部教授、大学附属病院副院長、同先端医療支援センター長などを経て、2016 年から国立研究開発法人国立循環器病研究センター理事長を務めている。

日文：滝川 進

写真：熊本大学の HP & Twitter